エンジョイ読書

地球はどうしてできたのか

われわれが日々、当たり前に暮らし、踏みしめているこの大地は、いつ誕生し、どのようにして現在の形になったのか。地球の内部でどんな力が働いているのか。

大陸移動という言葉はかなり一般的になり、ユーラシア大陸にインドがぶつかってヒマラヤ山脈ができた、などという話は小中学校でも習うようになった。でも、大陸を動かす原動力となっている「マントル対流」やそのメカニズムについて学ぶ機会は、残念ながら少ない。なにしろ、著者が「おわりに」で嘆いているが、高校での地学の履修率は理科4科目の中で最下位なのだ。

マントル対流など面白く紹介

本書は、われわれが暮らすこの大地のなり立ちとダイナミックな変化を、非常にわかりやすく面白く伝えてくれる。

「マントルの融解と化学分化によってできた大陸は、地球にとって〝異質〟な存在のようです。たとえが正確かどうか分かりませんが、鍋料理で、鍋つゆの熱対流をマントル対流にたとえると、大陸は余分な〝あく〟のような存在なのかもしれません」

中学生・高校生だけでなく、「地球学」に苦手意識のある大人にも、ぜひとも読んで欲しい。

（竹内薫）

目利きが選ぶ今週の3冊

（★★★★★これを読まなくては損をする、★★★★読みごたえたっぷり、お薦め ★★★読みごたえあり、★★価格の価値はあり、★話題作だが、ピンとこなかった）

竹内薫 サイエンス作家

地球はどうしてできたのか
吉田晶樹著

（講談社ブルーバックス・980円）★★★★★

謎の蝶アサギマダラはなぜ未来が読めるのか？
栗田昌裕著

1000㌔を旅するというちっちゃな蝶。彼らはどうやって天気を「読む」のか。本書は、その謎の生態に迫る続編である。動物好き、蝶好きにオススメ！（PHP研究所・1800円）★★★★

精神と自然
ヘルマン・ワイル著

アインシュタインも一目置いていた数学者・物理学者ワイルの講演録。素粒子の基本であるゲージ理論から哲学まで、知の巨人が縦横無尽に語り尽くす。岡村浩訳。（ちくま学芸文庫・1600円）★★★

井上章一 風俗史家

幕臣伝説
氏家幹人著

将軍の性生活を監する御伽坊主とよばれる女性が、幕臣のなかにはいた。江戸幕府と幕臣の、あまり知られぬ日常に、光をあてた本。ディープな江戸を、かいま見せる。（洋泉社歴史新書ｙ・950円）★★★★

葛飾北斎　萬福和合神
石上阿希解説・現代語訳、赤木美智翻刻

北斎の艶本を、現代語訳もそえ翻刻する。画像は鮮明。解説は、春画の招福面にも言及する。若い女性がこういう仕事へ手をそめる時代となったことに、感銘をうける。（木楽舎・1800円）★★★

明治の「性典」を作った男
赤川学著

（筑摩書房・1500円）★★★★

北上次郎 文芸評論家

時速47メートルの疾走
吉野万理子著

中学生４人の視点で学園での日々を描く連作集。ヤングアダルト向きの造本だが、もちろん大人が読んでも面白い。この著者は確実に成長を続けている。（講談社・1400円）★★★★

未必のマクベス
早瀬耕著

（早川書房・2200円）★★★★

敬語で旅する四人の男
麻宮ゆり子著

表題作は、友達でもない30歳前後の４人が佐渡を旅する話で、第７回の小説宝石新人賞受賞作。連作集だが、それぞれの人生模様を浮き彫りにして読ませる。（光文社・1500円）★★★

未必のマクベス

気持ちのいい文章だ。どこまでも滑らかで、どこか甘く、さらに懐かしさを秘めている。忘れていたことをどんどん思い出す。小説を読むということは文章を読むことなのだ、と改めて感じたりする。

こういう小説はストーリーを紹介しても、あるいは犯罪小説、ハードボイルドというジャンル分類をしてもさして意味がない。では、どういうふうに紹介すべきか。

本書の語り手である38歳の中井優一が、高校時代を思い出すくだりがある。思い出すのは鍋島冬香という同級生だ。特に何かあったわけではない。だがその後、彼女のことを忘れた日が一度もない、というから尋常ではない。

これは本書の冒頭近くに出てくる回顧だが、ここまで書かれるとこの女性が本書に登場してくるのは必然だ。

問題はどういうかたちで、いつ登場してくるかだが、実に意外なかたちで登場してくる。この構成のうまさが群を抜いている。

話の展開を、特に後半を、乱暴すぎると批判する向きもあるかもしれないが、なあに、気にすることはない。これは究極の初恋小説だ。

（北上次郎）

構成の妙、究極の初恋小説

明治の「性典」を作った男

かつて、オナニーは体によくないからやめろと、いましめられた時代があった。今はもうそんなことを言わない。しかし、一時期の西洋医学は、そこにたいそうこだわった。明治期にこれを導入した日本でも、あちらの流儀にならい、オナニーを禁圧したのである。

その新しい考えを普及させるのに大きくあずかったのは、『造化機論』。アメリカの性医学書を翻訳し、一八七五年に刊行された書物である。好色そうに見えた図版の力もあり、これが明治期の大ベストセラーとなる。皮肉なことに、春情もそそるそんな本をとおして、オナニーを抑圧する考えはひろがったのである。

翻訳者の千葉繁がどんな人物だったのかは、まったくわかっていなかった。その人間像に、この本はありとあらゆる手立てをこうじ、せまってゆく。その過程で、幕末明治初期の社会的な変動が、よくある史書とはちがう形で浮上する。武士身分の変容、医学界の覇権をめぐる葛藤などが、見えてきた。

人物探索の試行錯誤を、あらいざらい書いてくれているところも、ありがたい。なるほど、ナニ人のことはこうやってしらべるのかと、腑に落ちた。

（井上章一）

翻訳者の人間像に迫る

ベストセラーの裏側

ヨシタケシンスケ「りんごかもしれない」

イラストレーターのヨシタケシンスケによる初の絵本『りんごかもしれない』（ブロンズ新社・1400円）が部数を伸ばしている。昨年4月に発刊して現在30刷14万5000部。1個のりんごに対して「ほかのものになりたかったのかもしれない」「こころがあるのかもしれない」と空想を巡らす内容で、「発想えほん」としてシリーズ化にも乗り出した。

著者は本や広告のイラストを手掛けるほか、日常のひとコマにコメントを添えたスケッチ集も出版している。「大人が少し考えさせられてクスッと笑える絵で、出版業界にもファンが多い。今回、発想力をテーマとした絵本を企画するにあたって執筆を依頼した」。自らもファンのひとりだったという編集担当の沖本敦子氏はこう話す。

あるひ　がっこうから　かえってくると…
…　テーブルの　うえに　りんごが　おいて
あった。……でも……もしかしたら　これは
りんごじゃないのかもしれない。（中略）じ
つは　なにかの　タマゴかもしれない。

大人もクスッ 書店員が支持

発刊前にフェイスブックのページを立ち上げたことや、発刊後に絵本としては異例の著者による書店回りをしたことなどで書店員の支持を広く獲得。「初動はまずまず」（沖本氏）で、昨年中に4万部余りを売り上げた。

弾みが付いたのは昨年末。12月に全国の児童書売り場担当者が決める「MOE絵本屋さん大賞」で第1位となり、年末から年始にかけて全国の書店で注目の絵本として扱われた。以降、毎月1万部以上のペースで増刷する人気を維持している。

ひとくちに児童書といっても対象年齢が限られる場合があるが、本書は幼稚園児から小中学生まで「様々な年齢で違った楽しみ方ができる」（同）。4歳児から中学生まで幅広い反響があるといい、ある小学校では図画工作の授業で本書を題材にしたという。

今年9月には続編となる「発想えほん」第2弾として『ぼくのニセモノをつくるには』を発刊した。自分のニセモノをつくるために、自らの属性を様々な角度から考える一冊。既に3万7000部を売り上げている。

ベストセラー　新書

①営業部はバカなのか　北澤孝太郎著（新潮社）
②出世する人は人事評価を気にしない　平康慶浩著（日本経済新聞出版社）
③創価学会と平和主義　佐藤優著（朝日新聞出版）
④地方消滅　増田寛也編著（中央公論新社）
⑤日本の風俗嬢　中村淳彦著（新潮社）
⑥住んでみたヨーロッパ　9勝1敗で日本の勝ち　川口マーン惠美著（講談社）
⑦日本人が一生使える勉強法　竹田恒泰著（PHP研究所）
⑧議論の作法　櫻井よしこ著（文芸春秋）
⑨ゆるり　京都おひとり歩き　柏井壽著（光文社）
⑩プライドが高くて迷惑な人　片田珠美著（PHP研究所）

（10月13日から19日まで、大阪・紀伊国屋書店梅田本店）